

うみね

インフラクト

第一幕

舞台は家の中。舞台センター奥の壁に窓がある。舞台下手にはドアがあり、玄関口に通じている。舞台上手の壁にもドアがあり家の奥や2階への階段へと通じている。

舞台やや上手寄りにソファとソファテーブルが置いてある。

やや古い家の内装をリフォームして住みやすくしましたよという感じ。

壁には絵などはなく、壁際の床に植木鉢が3個ほど置いてある。上手隅に電話がある。

時間は午前中。

草加護が入ってくる。

まもる みなさんこんにちは。草加護と言います。草加せんべいの草加と書いてくさか。護は守護霊の護と書いて

まもるです。この家に、母と二人で暮らしています。年齢は、四十三歳・・・独身です。

中学、高校、大学、と、まあ平均より少し下ぐらいの頭のレベルの学校を卒業して、地元会社に就職しました。会社も、大きくもなければ小さくもないような・・・でも中小企業の部類に入るようなところです。そこで、事務系の仕事をやっております。どうです？ここまでの話を聞いて。（観客に）どうですか？あなたどう思いました？面白いと思えました？ここまでの私の話・・・面白い？そうですか。でもそうおっしゃったあなたの表情は、面白くなさそうに見えますよ。そうです。つまらないんです。盗んだバイクで走りだすわけもなく恋愛話もなく学校卒業して、40過ぎて独り身で、母親と同居している事務職の男なんて、この日本に腐るほどいます。そんな私の自己紹介が、面白いわけがないんです！・・・私もそう思います。こんなつまらない自己紹介しか言えないような自分は、これから先も、例えば誰かと飲みに行った時に話せる面白いエピソードの一つもなく、ただ淡々と何も起きない人生を送るのだと漠然と思っていました・・・これから私が話すお話しは、私の身の周りに、つい最近起きたことです。

どこから話そうかな・・・時間。時間は大事ですよね。よく演劇なんかで、何時に起きているのか分からない

演劇ってありませんか？それで、「あらっもうこんな時間ね」ってセリフが急に出てきたりします。こんな時間って何時？午前？午後？ピンポイントと来客が来ます。「誰か来たわ。こんな時間に」だから何時？
そういうことがないようにきちんと説明しますね。時刻は・・・確か午前の十時くらい。冬が終わって、これから春になりますよって寒い日と暖かい日が交互に来るような時期でした。私は、本当ならば職場で働いている時間帯でしたが、ある事情で家に母といました。

まもるのセリフの途中から、草加景子が上手ドアから入ってくる。

景子 あんた、どうしたの？

まもる いや、別に。

景子 そう？ なんか、大勢の人に向かって喋っていたみたいけど。

まもる そんなことないよ

景子 まあいいわソファに座って今日は会社お休みだったっけ？

まもる ・・・ああ。有給休暇がたまってたから、それを使った休み。

景子 ふーん。有給がたまってたんだ。昨日は普通に出勤していたけど？

まもる そう。昨日さ、こういうご時世だから、有給休暇をちゃんと消化しておけて上司から言われたんだよ。

でもせっかく休みもらっても、やるような趣味もないし出かける所もないから、なんだか持て余しちゃうよね。

景子 (ためいき) こういう日に一緒に出掛けるような良い人でもないの？

まもる 残念ながらいません

景子 そう・・・あなた、有給休暇って、本当にたまっていたの？

まもる たまってたよお。いっぱい。

景子 ・・・・ならいいけど

まもる 今日は体操教室行かないの？

景子 レディースポ？

まもる ん？

景子 レディースポーツ。略してレディースポ。あと、「体操教室じゃなくて、「女性のための美と健康の体操教室だからわかったよ。で、それはまだ行かないの？」

景子 まだよ。今日は2時からだから、1時半くらいに出るわ。

まもる そうか。

景子 あんた、今日お父さんに挨拶した？

まもる ああまだだった。ちよっとしてくる。(上手ドア内に)

お鈴の音がする。

景子 大事なこと言われなと思い出さないと、ホントあの人とそっくり。

玄関のインターフォンが鳴る。

景子 はい(下手ドアに入る)

間

まもる (上手ドアから入ってきて玄関の方に目をやり)お客さん?(ソファに座る)誰だろ?(ふと携帯を取り出して見ている)着信なしか・・・どうなってんのかな・・・今頃大騒ぎだよな・・・

【じいじやなごですからじいじや】【いえでも・・・】【大丈夫ですよ、じいじやじいじや。息子と二人で暮らしていますので、特

に気になさらなくても大丈夫ですから】【はあ・・・ではすみません、おじゃまします】と声が聞こえる。

まもる エ？ あがるのか？(立ち上がったて迎える)

景子 (入ってきて)どうぞ。散らかっていてすみません。

続けて、大きめのバッグを持った富永友美が入ってくる。

友美 すみません、なんだか・・・

景子 あ、まもる。こちら、向かいのお家があったじゃない？吉田さんの隣の。あそこ今日から越してきた、ええと・・・
友美 富永です。どうぞよろしくお願いいたします。

まもる 息子のまもるです。こちらこそよろしくおねがいたします。
景子 どうぞごゆっくりしてくださいね。今、お茶でも淹れますから。

友美 奥様そんなお気をつかわないください。あの、ほんの引っ越しのご挨拶で伺わさせていただきましたから。
それに、このあと仕事もありますし・・・

景子 まあそうですね？じゃあ旦那さんと共働きで・・・
友美 いえ、夫はいないんですよ。ちょっといろいろありまして離婚しまして。息子と二人暮らしです。

景子 あらそうなの・・・息子さんはお幾つくらい？
友美 もう二十一になります。

景子 そう、もうそんな大きい息子さんがいらっしゃるのね・・・ごめんさいね、こちらが聞いてばかりです。
どうぞどうぞおかけになって。

友美 いえいえ、もうそんなお邪魔してもあれですから。

まもるの携帯が鳴る

まもる ちよっとすみません。もしもし？(出ながら上手ドアに消える)

友美 お忙しそうですね。

景子 さあ・・・このあたりは、駅から遠くて不便でしょう？お店も一番近いのは、その「スーパーあまや」くらいですものね。

友美 そうなんですか？そのスーパーってどのへんにあるんですの？

景子 スーパーあまや？あ・・・その前の道をそっちに行って、すぐ左に曲がって道なりに行くところ・・・道が3つに分かれているから、その真ん中の道をクイッと入って行ってバス通りに出て右に曲がって・・・5分くらい歩いた右側かしら

友美 えと・・・そこを出て左・・・ですか？

景子 ごめんなさいね分からないわよね。確かこっちに町内のくわしい地図がありますから、それ見ながら言えばわかりやすいかしら。(上手ドアを指して)こっちへどうぞ。

友美 はあ・・・でも・・・

景子 本当にすぐ分かりますから地図見れば。かばん、よろしかったらそこに置いてください。

友美 そうですか？じゃあすみません。(バッグをソファテーブルに置く)

景子 ごめんなさいね。うまく説明できなくて・・・

景子と友美、上手ドアに消える

まもる、携帯を見ながら、困った顔で上手ドアから入ってくる。ソファに座って目をつぶって腕組みしながら考え込む。

まもる (深いため息)最悪の事態だ・・・クソ！(テーブルをガツンと足で蹴ってその勢いで上のバッグが落ちてしまった)

あ、(慌てて中の物を拾おうとして) うん？(落ちた拳銃を持って) エエ？これ……にせもの？だよな？にしては重
いぜい……

「毎週木曜日は肉の日って言ってお肉が安いよ」と景子の声がする。

まもる、慌てて中身をバッグに戻してテーブルの上に置いてそ知らぬふりをする。
景子と友美が入ってくる。

友美 ご丁寧ありがとうございます。ホント助かりました。

景子 いいんですよ。

友美 (バッグを取り) 息子さんもすみません、突然お邪魔しまして。

まもる いえいえ。

友美 引越してきましたけどこの辺に知り合いなんていないものですから、少し不安もありまして。でもこんな
親切にしてくださいって、本当にありがたいですわ。

景子 そんな。大したことありませんよ。

友美 今後もよろしくおねがいします。

景子 いいええ。こちらこそよろしくお願ひします

友美 (バッグの中を見て) あら……あ……あ……

景子 どうかしました？

友美 いえ……(まもるを見るが、まもるは目をそらす)

景子 大丈夫ですか？

友美 あらすみません。なんでもないんですの。じゃあ私そろそろ……

景子 (大きな声で) アー!

5秒の間

まもる ……母さん？

景子 お茶出し忘れた。ダメね年とると。

景子と友美、微笑み合いながら下手ドアから出ていく
まもる、その方向を見てほっとする。

まもる (舞台中央に出てきて客席に)……とまあこんなことがありました。バッグから落ちたあの拳銃……ひよっとしたらあの人は熱烈なガンマニアなのかなあ。銃の模型が大好きすぎていつも持ち歩いているのかなあ。それかあの人の息子がその手の模型の収集家で、なにかのひょうしに母親のバッグにコレクションの銃が一丁入ってしまったとか……そんな感じで想像していました。言っておきますけど、私はそのあと何も無ければ、あの人にあの拳銃みたいなものはなんですかと問い詰めたり、誰かに「うちの近所に越してきたおばさんが銃持っていてさあ、危ないよねえ」みたいに言ったりとか、そういうことをするつもりはなかったんですよ。「どうなるか分からない時はただ黙って見ている。行動はしない」元来私はそういう人間なんです。

景子 (上手ドアから出てきて) あんだ、ちょっと誰かになんか説明してた？

まもる いや。だって、誰もいないじゃない。家の中だし。

景子 そう。なんかおかしいわね。まいいわ。じゃあ、私ちょっと行ってくるから。

まもる どこ行くの？

景子 朝言ったじゃない。1時半にレディースポ行くって。

まもる ああそうだったね。いってらっしゃい。

景子 カギは？

まもる 開けといていいよ

景子 分かったわ。じゃあいってきまーす。(下手ドアに去る)

まもる、それを見送る。

携帯電話の着信音が鳴る。

まもる (携帯に出て) はい?・・・課長ですか?連絡待ってましたよー。で、どうなりました?・・・ええ。・・・はい。
・・・そうですか・・・あー・・・そうですか・・・分かりました。

玄関のインターフォンが鳴る

まもる すみません。ちょっと待っていてください。(携帯をテーブルに置いてはいーい(下手ドアに消える)

ボフ、というにびい音がする。まもるの「ウフーななな」という声。

下手より、にこやかな表情の友美がまもるの耳を引っ張って出てくる。まもるは「ちよ、ちよ」と「痛てて」と声を出して
いる。友美の扱い方は人間というものの動きを理解している動きである。

友美、舞台中央で、まもるを投げ放す。まもるは横に倒れる。

まもる なにするんで! (友美がナイフを持って突き出すので声小さくなり)す・・・か・・・

友美 (ナイフを構えながら)ごめんなさいね。

まもる な・・・なんです??

友美 ちょっとね、あなたに聞きたいことがあったのよ。

まもる 聞きたい事って?

友美 あなた見たわよね?アタシのバッグの中。

まもる ・・・・見てませんよ

友美 見たわよね?何が入っているか。

まもる
………

友美 あ、嘘ついてる？ つかない方がいいわよ、嘘。

まもる
………はい。見ました。

友美 草加さんの息子さん、正直な方で良かったわ。

まもる
な……なんなんですか？警察呼びますよ！

友美 警察？どうぞ。でもお巡りさんがここに来る前に、あなたはとうなっちゃうかなあ？

まもる
………(睨む)

友美 あー、こんなおばさんだから、俺が本気になればなんとかなると思っているかな？ ナイフ持ってるけど、

うまくいけばナイフ奪って逆転するの簡単じゃね？とか。でも残念、あなたみたい人今までいっぱい見てきたの。

そういう、なんの根拠もないけど、ただ人を見た眼だけで判断してきた人を。

まもる
………な、なんですか？ 何が目的なんですか？

友美 ごめんなさいね、そんな大したことじゃないんだけど。ちょっと、あなたが見たアタシのバッグの中のもの。

あれ、黙っていてもらいたいの。

まもる 見たものって、あの……銃？ あれって……おもちやですよ？

友美 おもちや？ まあそう思ってもらえるならそうでも良いわ。ただね、あれをあなたが見たことをあっちこちで

べらべらぺらぺら喋られちゃうとね、アタシの仕事に影響が出るのよ。

まもる 仕事……ですか？

そうなのよ。

友美 仕事って……何の仕事？

まもる 仕事……ね。例えばさ、誰でも嫌いな人っているじゃない？

まもる はい

友美 まあ、嫌いじゃなくても、じゃまだとか、いるだけでムカつくとか……

まもる はあ……

友美 そういう人にいなくなっただけでほしいって思っている人が、アタシにお願いしてくるの。もしあいつがいなくなったら、十分なお礼をしますのでよろしくお願ひしますって。

まもる それって・・・ひょっとして・・・ころ・・・

友美 (ナイフを突き出して黙らせるだからね、あなたが「あそこのおばさんが銃を持っていますよ」と誰かに言ったり、ツイッターで「おれの家の近所のおばさん銃を持っている。危険。要注意」なんて書き込みされちゃうと、仕事がりにくくなるのよねえ。

でもマ、話し合いで平和的に解決することなんてあまり無いって分かっているから、あなたがアタシの願ひを聞いてくれない場合もあるわよねえ。その場合は・・・

まもる その場合は？

友美 (にっこり微笑む)

まもる ……

友美 (何かの動きで暗示させる)

まもる ……分かりました。

友美 そう？ありがと。けど一応言っておくけどね、アタシですっごい疑り深いのよ。だから、あなたじゃない誰かがこのことを言い出したら、やっぱりあなたの責任って思うから、気を付けてね。

まもる ……はい。

友美 人の話を素直に聞いてくれるいい人で良かったわ。草加・・・ええと・・・まもるです。

友美 まもるさん。ごめんなさいね、最近人の名前聞いてもすぐ忘れちゃうから。

まもる (ナイフを指し)・・・それ、しまってもらっているんですか？

友美 あら失礼いたしました。(ナイフをしまふ)

まもる (ホッと一息つく)

友美 まあ、黙ってくれているなら、タダでは言わないわ。お礼するわよお礼。

まもる お礼って？

友美 仕事で。

まもる 仕事って・・・(意味深な態度)

友美 アタシが出来る仕事で返す、って言っているのよ。

まもる 仕事って、こ・・・こ・・・こ・・・

友美 あなたもさ、周りに、アイツ嫌いだからいなくなんないかなーって思う人間の一人ぐらいいるでしょう？

あいついなくなったら嬉しいのになあみたいな。

まもる・・・そ、そんな人いませんよ。

友美 ホント？ またそんな無理しちゃってえ。いいから言いなさいよ。

まもる だからいませんって

友美 そう？でも、すぐに出てくるかもしれないわね。人の悩みの7割は人間関係って言うから。あら、8割だったかしら？ポケットから名刺を出してこれ、今使っている携帯の番号。嫌な人間が出たら、ここにかけた。

まもる (名刺を受け取る)

友美 その番号にかけて、電話が繋がったらすぐ「モンキーのモンはもんもんとするのモン。キーはキー坊のキー」って言うの。

まもる モ、モンキーのもん？

友美 モンキーのモンはもんもんとするのモン。キーはキー坊のキー

まもる も、モンキーのモンはもんもんとするのモン。キーはキーロックのキー。

友美 もんが一個多い！

まもる モンキーのモンはもんもんとするのモン。キーはキーロックのキー。

友美 キーロックってなあに？

まもる も、モンキーのモンはもんもんとするのモン。キーは・・・

友美 キー坊。

まもる キー坊のキー！

友美 そう。覚えて？

まもる モンばかりだ。

友美 (頬を叩いて) いいのよ。

まもる モンばかりだと思ったら、後の方はあっさり。

友美 (頬を叩いて) いいでしょう？ いい？これが仕事を申し込むときの合図だから。

まもる なんてこんな面倒なことしているんですか？

友美 この携帯に仕事の依頼だけ来るとは限らないでしょう？宅急便のお兄さんが「不在連絡票入れたんですけど、今日の何時がよろしいでしょうか？」て連絡かもしれないじゃない。「不在連絡票って人？中国人か。フザイ レンラク。じゃあ始末しておきますわ」ってなっちゃうでしょう？

まもる はあ……

友美 仕事の依頼だつてね、「妻の愛人を殺してくれ」なんて深刻そうに言わないのよ。近くで誰が聞いているか分からないんだから「どうもー、お世話になってます。妻の元カシの田中、チャチャっとお願いしまーす」なんてトーンで言ってきたりするんだから。仕事の依頼だか保険の営業の電話だか分からないのよ。

まもる 大変なんですわね。じゃあ、メールとかラインじゃダメですか？

友美 (頬をはたく) ダメに決まってるでしょう？ 画面に「妻の元カシ田中お願いします」って、証拠まる残りじゃない。

まもる わかりました……

友美 だから、その合言葉言っつて、それからターゲットの名前と知っている限りの情報を言っつて。

まもる あとはこっちでいろいろ調べるから。

友美 (名刺を受け取り) ……はい。

まもる いい？ お母さん、大切にしよう？ 大事にしてあげなきゃね。

友美 母は……このこととは関係ないですよ？

友美 ……

まもる！

友美　・・・(表情を変えて)じゃあ、お邪魔しました。失礼します。

友美、スッと下手から去る。

まもる、その姿を見送る。それから一度名刺に目をやって、もう一度去った方を見る。

溶暗

第二幕

翌日の夕方6時頃。ソファの一人掛けの方に富永颯太が座っている。テーブルの上に菓子箱が乗っている。上手ドアからお盆にお茶を載せた草加景子が入ってくる。

景子 (お茶を出して) どうぞ

颯太 すみません、いただきます。

景子 (ソファに座って) いいええ。こちらこそ、わざわざすみませんね。

颯太 いえ、本当に助かったって言ってましたので。

景子 昨日、お母様からお話しお聞きしましたけど、専門学校生なんですって？

颯太 はあ……

景子 差し支えなければ、何の専門学校なのかしら？

颯太 あ……ホテルマンとか、旅行のツアーコンダクターになるための専門学校です。

景子 そうなの？じゃあ、今勉強中なのね？

颯太 はあ。

景子 偉いわねえ、若いうちから目標に向かって勉強中で。

颯太 はあ……ありがとうございます。

景子 (笑顔で間を持たせて) どう……この辺りは……ちょっと不便だけど、静かで良い所でしょう？

颯太 はあ……そうですね。静か……ですね。

景子 でもねえ、若い人が遊びに行くとかいう場所はあるに近くはなくてね。レストランみたいに食事できる所なんかも近くになくて、一番近いっていうと、ほら、バス通りまで出て左に行ったらあるコーヒー屋さんへらいで、あそこは静かで落ち着けるんだけど、コーヒー一杯350円だから、ちょっと高いのよねえ。

颯太 はあ、そうなんですか・・・3500円・・・だと、高いですね。

景子 そうなのよ。

颯太 (お茶を飲む)

景子 (お茶を飲む。間がもたない)何か、アルバイトなんかされているの？

颯太 バイト・・・ですか・・・やっています。家電製品の、倉庫の仕分け・・・です

冷蔵庫はこの支店に行くからこのコンテナとか、テレビは九州の支店に行くからこっちとか・・・

景子 大変ねえ、重いものとか運んでいるんでしょう？

颯太 はあ・・・でも、ぼく、人と接するのが苦手なんで、家電製品が相手だと気が楽です。

景子 そう・・・ごめんなさい、ホテルマン、になりたいのよね？

颯太 はあ、まだ決めてないんですけど・・・ホテルマンかツアーコンダクターになりたくて・・・

旅行がすきなんです。

景子 そうなの！。

颯太 はあ。

景子 じゃあ、頑張ってるね。

颯太 ありがとうございます。

景子 (・・・)(いらいんと思っ所はあるけどニッコりと微笑む)

颯太 (無言でおじぎすする)

まもるが下手から帰って来る。

まもる たいま

景子 おかえり。どこ行っていたの？

まもる ああ、ちよっとね。

景子 あ、こちらね、ほら昨日いらしたじゃない？向かいの家に引っ越してきた富永さん。あの富永さんの息子さんの
颯太さん。昨日、スーパーあまやの場所をお教えしたからそのお礼に、こんなお菓子お母さんから言付かって
持ってきてくれたのよ。

颯太 お邪魔してます。富永颯太です。よろしくお願いします。

まもる いえ、わざわざすみません。草加護です。よろしく申し上げます。

景子 こんな若い人とお話するの久しぶりだから、ちょっと私が引き止めて、楽しくお話ししていたトコなのよ。
ごめんなさいね、こんなおばあちゃんが相手で。

颯太 いえ、大丈夫です。

まもる 颯太・・・君？

颯太 はい？

まもる (言おうかちょっと逡巡して)・・・お母さんは、どういったお仕事をされているんですか？

颯太 母は・・・老人ホームで介護の仕事をしています。早番とか夜勤とか・・・時には夜中に人がいないからって
呼び出されたりして、大変みたいです。

まもる (ひとりごちて)そういうことになっているのか・・・

颯太 なにか？

まもる いやあ、なんでもありません、ありがとうございます。

颯太 (立ち上がり)じゃあ、そろそろ失礼します。すみません、お邪魔しました。

景子 いえいえ、すみませんねこれ。わざわざありがとうございます。

颯太 お茶、ごちそうさまです。

景子 いーえー。まだいつでも来てね。

颯太とそれを見送る景子が下手から出ていく。
すべし景子が戻っていく。

景子 人と接するのが嫌だけど、ホテルマンになりたいんだって。よくわかんないわ。

まもる あの子、お母さんの仕事について、どう思ってるんだろう？

景子 (湯呑を片付けながら)お母さんの仕事って、老人ホームの介護？大変よね。

まもる ……そうなんだけどね……

景子 何？ なんかあんた隠し事でもあんの？

まもる な……なんにもないよ！

景子 ならいいんだけど。なんか、何個も悩み事抱えてるみたいな顔してるからさ。

まもる 悩み事なんて……

まもるの携帯が鳴る。景子は上手ドアに去る。

まもる もしもし？課長ですか？……はい、草加です。連絡待ちましたよー、どうなったのか気になって気になって、

……はい……確かに、今日会社の近くまで行きましたよ。だってあんなことが起きて、どうなったのか

心配で……はい、ちょうど会社から出た風張さんに声をかけました。はい……はい……分かりました。

じゃあ、うちの近くに来てくださるんですね。なら、近くにコーヒースhopがあるんで、そこで………分かり

ました。今すぐ出るんですか。はい。じゃあ、そこで。(切る。上手ドアに向かって)母さん、ちょっと出て来るか

ら。(上手ドアの中に消える)

上手より、景子と護がテーブルを運んで来ながらしゃべっている。

景子 さっき帰って来たはっかじゃないの？ どこ行くの？

まもる いいから、ちょっと行ってくるだけだよ。

二人、下手に消えて、1個ずつイスを持って来ながらしゃべっている。

景子 タご飯はどうするのよ？

まもる そんなにかからないから。帰ってきたら食べるよ。だから、先に食べていてよ。二人でテーブルを持ってくる。

景子 そう言ってる、結局食べて飲んで帰ってくるんだから。

まもる そんなことしないって。

景子 お父さんもそう。夕方ちょっと出てくるってフラッと出てって、午前様で帰ってくるんだから。

まもる すぐそのコーヒーショップ行くだけだよ。

景子 じゃあもう知らないよ私は。(上手ドアに消える)

まもるが上手側のイスに座って、ひと呼吸で照明やBGMが変わってそこはコーヒーショップになる。下手から、吉田永一が会社帰りという姿でやってくる。

吉田 お待たせ。ごめんね、急に電話かけて

まもる いえ。わざわざ来て頂いてすみません。それで・・・どうなってますか？会社は。

吉田 (店員に)ホットコーヒー・・・いやー、大騒ぎになっているよ。キジマ産業の山本さんが怒り狂って、社長のところに乗り込んできたよ。損害賠償を請求する。弁護士立てて裁判になってもいいんだぞって騒いでね。

まもる そうですか・・・やっぱり大きいことになっちゃってますね。

吉田 ・・・・草加君、大丈夫かい？ 精神的に参ってないかい？

まもる 私でしたら大丈夫です。すみません、ご迷惑おかけして。

吉田 そんなことはいいけど。しかし、参ったよなあ・・・

まもる はい。まさかあのファイルに入っていたキジマ産業の顧客データが、外部に流出するとは思いませんでした。確かにそうだね。あの顧客データの中に、キジマ産業の得意先も入っていたらしいんだ。

吉田 それで、その取引先がカンカンで、キジマさんとは取引中止になる流れだそうなんだよ。

まもる エ？ それじゃあ・・・うちの会社の方への損害賠償って・・・

吉田 もし正式に請求されたら、かなりの額になるんじゃないのかなあ・・・

まもる いやあ、マズイなあ・・・

吉田 非常にマズイよね・・・でも、気にしないで。大丈夫だから。

まもる はい・・・

吉田・・・君、今日、会社の近くまで来たんだって？

まもる はい。家にいてももういろいろ考えちゃってしょうがないから、とりあえず会社の前のコンビニに行って、

誰か出てこないか見ていたんです。そうしたら、風張さんが出てきたので、ちょっと声かけて会社の中がどんな感じなんだか教えてもらったんですよ。

吉田 そうか・・・それで、風張さん、なんて言ってたの？

まもる はい。もう会社中が大騒ぎになっているって。社長も激怒して、誰がこんなミスしたんだってうちの課に来て、課長の方に詰め寄ってきたって。あと、うちの社の情報管理がずさんだって話が業界で流れてしまって、

他の課の取引先も、うちと取引をやめたいって言ってきたのが何社かあるって・・・

吉田 ああ。社長が偉い剣幕で、なだめるのに本当大変だったんだよ。でも本当に気にしないで。君のミスってわけじゃないんだから。

まもる・・・すいません。

吉田 このミスは、会社全体でさ、起きてしまったことなんだから。

まもる そうですか。ならいいんですけど・・・

吉田 とにかくさ、今は君の身体とか健康が心配だからね。しっかり休んで、英気を養ってよ。

まもる ありがとうございます。それであの・・・風張さんが言っていたんですけど、私が昨日から会社を無断欠勤していることになっているって。課長が「ちょっと混乱してしまっているから」とりあえず君は明日から出勤しないで自宅待機するようだと上から指示が出た。取引先には私が言っておくから」とっておっしゃってくれたんですよ...

吉田・・・ああ、そうだったっけ？・・・

まもる そうですよね？ 私が提出した「自宅待機届け」、出してくれたんですよ？

吉田 うーん……

まもる 出してないんですか？

吉田 ちよっと……私の判断で、まだ出してないんだよ。

まもる え？なんですか？

吉田 だからね、怒っている社長にそんなものを見せてしまうと、君が責任逃れで逃げたと思われるんじゃないかって考えてだね……

まもる でも、自宅待機するのは上からの……社長からの指示ですよ？

吉田 そうだね……まあ、でももう認めなさいよ。

まもる なにをです？

吉田 だから、自分のミスでこんなことになってしまったってことをだよ。

まもる エえ？ いや……だって……あの顧客データの入ったファイルが届いたときに、私は中身を一度確認しました。そしたら、課長が自分も確認しておきたいからと言ったから、課長のクラウドにファイルを移しましたよね？

吉田 私は……君から……ファイルは受け取ってないよね？

まもる は？ ちよっと待ってください。確かに、私、課長のクラウドに移しました。課長も確認して「わかったよ、ありがとう。」ってわざわざ言ってくれたじゃないですか？

吉田 申し訳ないんだが、覚えがないなあ……

まもる いやいやいや、その後で、一応、私から課長のパソコンにメールを送りましたよね？「お忙しいところ恐縮ですがキジマ産業からのファイル、顧客データです。社外秘ですのでよろしくお願いします」って。

吉田 そう？ 君のパソコンから私のパソコンへメールも着てないな。君の勘違いなんじゃないか？

まもる いや、確かに送りましたよ。あれは確か……4日前の月曜日！

吉田 あのね、昨日ね、社長と一緒に、君のデスクの上のパソコンを開いてみたんだよ。そしたら、送信ボックスにそんなメールは入ってなかったよ。

まもる え？・・・

吉田 あとね、君のパソコンの中に、顧客データのコピーが入ったファイルを見つけたんだ。

まもる そんなは・・・

吉田 君のメールボックスには、「今回のネタ、二〇で買った」って送信者の分からないメールの着信履歴があっただけ。社長も私もちょっと困ってしまって、ひよっとしたら警察に連絡を・・・

まもる 待ってください！ そんなメールを受けた覚えもないですし、データはコピーもせずに課長にお渡ししましたし・・・

吉田 まあ、ちょっと落ち着きなさいよ。いいかい草加君、これは事実なんだよ。君のパソコンからそういうものがいろいろ出てきちゃっているんだから。

まもる だから・・・だから、誰かが私のパソコンを使って・・・！課長、仕事で必要だからって、私のパソコンのパスワード、知ってましたよね？ データを最後に渡したのも課長だし・・・ひよっとして自宅待機させたのも・・・

吉田 あまり大きな声出さないで。草加君、とにかく、君のパソコンから、いろいろ出てきたんだよ。

まもる あなた・・・恥ずかしくないんですか？自分がやったことを私に・・・

吉田 私が？ 何を言ってるんだい？ どう考えても君がやったことじゃないのかい？

まもる そ、そんな・・・なんで・・・

吉田 もうね、君が何といっても、証拠は色々出てきているんだから。いいかげんあきらめなさい。な？君が素直に認めれば、私だって社長が警察に行ったりおおごにするのを止めることが出来るからさ。

まもる 社長には・・・私が本当のことを言います。

吉田 無理だと思っただけ。社長は君が犯人だと思っただけ。草加君、これ、下手したら大変なことになるよ。損害賠償、何千万・・・払える？

まもる へ、弁護士に、そうだん・・・

吉田 そうだね。会社と裁判になるかもしれないから、それは必要かもね。でも、会社の中で君のために証言してくれる人なんかいないよ。みんな君がやったと思っている。まもるが何か言おうとするのをかばって君と私、みんなどっちを信じるかな？口数の少なくて周りともあまり親しくない君と、周りに気を使って「ソソソソソソ」やってきた私と

まもる ……

吉田 じゃあ、素直に認めるって決心したら私に連絡ちょうだい。悪いようにはしないよ。あ、ここは私が払うよ。
これから、大変だろうからね。(笑顔で)それじゃあ、身体に気を付けてね。(下手に去る)
まもる ……

景子、上手ドアから入ってくる。

景子 はいはい。全く、片付かないんだから。(椅子を一つ片づける)ほら、ポーっとしてないで、あんたも手伝ってよ。

まもる あ、ああ・・・(景子と一緒にテーブルを片付ける)

景子 あと、あんたコシね。

まもる ああ。(椅子を片付ける)

景子 人が足りないんだからさ。

照明、ふわっと変わって、家の中になる。

景子、ソファに座り、リモコンを客席に向けて押して、じっと客席テレビの方を見ている。

まもる、一人掛けソファに座り、考えている。

まもる ……あのさ、母さん。

景子 びっくりしたあ、何急に？ テレビ見たの？。

まもる あのさ…例えばだけど、この家って、売ってなったびびるんか？

景子 さあ・・・このへん駅から遠いし、もうこの家も古いから、そんなに高くは売れないんじゃない？
いって二千万とか？ 急にどうしたの？

まもる いや・・・なんか気になってさ。

景子 あんた、何か借金でもあんの？

まもる そんなのないよ。もういいよ。別に、ちょっと気になったただけだから。

景子 ふーん・・・あ、ドラマ終わった。(テレビを消す)じゃあ、そろそろ寝るから、エアコン消しといてね。

まもる わかった。

景子 おやすみね。

まもる おやすみー

景子、上手ドアに去る。

まもる、ため息を一つつき、頭を抱える。そして、携帯を持ち、アドレス帳を調べる。

まもる よしだ・・・吉田・・・あった。(通話ボタンを押そうとするが迷っている)今回の事は全て私のミスです。申し訳ありませんでした・・・なんでやってないのに、やったヤツに謝んなきゃいけないんだ！ちくしょう・・・ちくしょう・・・(頭を抱える)

まもる、ふとあることに気づいて、ポケットを探り始める。ポケットから出てきたのは・・・名刺だ。それを震える手で持ち、番号を押す。が、また悩む。悩んで、動かなくなる。

ふいに動き出し、立ち上がり、まだ悩みながら、通話ボタンを押して耳にあてる。

まもる ……あ、もしもし？ 草加・・・まもるです。あの・・・モ・・・モンキーのもんはもんもんとするのモン。

キーはキー坊の・・・キーはキー坊の。キーはキー坊の。キーは・・・キー坊の、キー。

カットアウト

第三幕

3日後。AM9時頃。家中。

富永颯太と景子がソファに座っている

景子 今日、学校はお休み？

颯太 いえ、これからです。

景子 そう。大変ねえ……。話が続かない)颯太さんは、恋人とかいらっしやるの？

颯太 いません。付き合ったこともありません。

景子 あらもったいないわね。いい男なのに。

颯太 ありがとうございます。(お茶を飲む)

景子 いえー……。(お茶を飲む)

颯太 あの……。今日はまもるさんは？

景子 まもる？ まだ寝てるわ。ここ3日くらい、夜もあまり眠れてないみたいなのよ。

颯太 へー……

景子 何かねえ、悩み事があるんじゃないかしらと思っただけだね……

まもる、上手から、眠そうな顔でやってくる

まもる おはよう

景子 あ、まもる。颯太さんがね、田舎からミカンが送られてきたから、おすそわけって持ってきてくれた……

まもる あ、おはよう、颯太君。ありがとうね。

颯太 おはようございます。

まもる ……お母さんは、お元気？

颯太 母ですか？ 最近、老人ホームに新しいお年寄りが入って、その人のことで忙しいみたいで、今日も朝早くから仕事に行ってます。

まもる ああ、忙しいんだ…

颯太 はい。(立ち上がり)それじゃ僕、学校があるのでそろそろ。お茶、ご馳走様でした。

景子 いいえー、わざわざありがとうございます。お母様によろしく。

颯太と景子、下手に消える。まもる、新聞を開いて真剣な表情で見て、何かを探している。景子、すぐに戻ってくる。

景子 ……なんか、最近あんた、新聞見て何か探しているみたいじゃない？

まもる ん？ うん…

景子 テレビもニュースばっかり見てさ。

まもる ……そうかな？

景子 まあ、いいけどね。

インターフォンが鳴る

景子 はい(下手に消える)

景子、渡真利 陽介と一緒に下手から入ってくる

渡真利 お母さん、すみませんね、朝から。

景子 いいのよ。小学校からのお友達なんだから。まもる、渡真利君よ。

渡真利 ヨー！

まもる (こいつか・・・という表情)

渡真利 すみません、お母さん。

景子 じゃごゆっくりね。

景子、上手に去る

渡真利 なんだよ？ そんな顔すんなよ。友達だろう？

まもる 友達って・・・

渡真利 思いつく？ 楽しい思い出を。

まもる (独り言のように) 嫌な思い出の間違いじゃないのか？

渡真利 エ？ なんか言った？

まもる 別に。

景子、三味線をかついで、上手より出てくる

景子 じゃあ渡真利君、ゆっくりしてらってね。

渡真利 あ、これからお稽古ですか？

景子 そうなのよ。今度発表会があるから、お稽古がんばらないと。

渡真利 今度ぜひ聞きたいなあ。お母さんの三味線。

景子 ま。ありがとう。

渡真利 頑張ってくださいね。

景子 ありがとう。じゃあね。(下手に去る)

渡真利 (腕時計を見せて)ほら、こし見ろよ。
まもる なに？

渡真利 ここにさ、バタフライの印が入っているだろ？ これ、レア物なんだよ。この間、ネットオークションで見つけてさ、ついつい落札しちゃったよ。

まもる じゃあ、高いんじゃないのか？

渡真利 三〇万。

まもる たかっ！

渡真利 このチャンス逃すともう無いと思ったから、即決だったな。というわけでさ、ちょっと、金、貸してくれ。
まもる ……なんでだよ？

渡真利 だから、これで三〇万使ったんだよ。それで今月苦しいから…

まもる いやだよ。

渡真利 友達だろう？ 困った友達をちょっとは助けようって気にならないのかよ？

まもる ならないね。それに、いままで貸した金も、ほとんど返してないものな。総額で一〇〇万近いぞ。

渡真利 あー、そんなこと言っているのいいのかな？(スマホを出して)これ、見てみろよ。

まもる これは…

渡真利 成人式の時、酔いつぶれて、ズボンもパンツも全部脱いじゃったお前だ。よく撮れてるだろ？

まもる 無理やり飲ませて酔わせて、パンツも脱がしたのはお前と仲間たちだろう！

渡真利 この写真、SNSにアップしちゃおうかなあ。それとも、お前の会社みなさんに送信しようか？ まじめに働いているお前のこんな写真見たらびっくりするよなあ。あ、もっといい写真もあるぞ。(これは、高校の時「トイレ

の便器に顔を突っ込んでいるお前の写真だし、こっちは・・・

まもる
やめろ！

渡真利
あれ？ やめてください、だろう？

まもる
やめて・・・ください。

渡真利
オッケー。まあ、それとは関係ないんだけどさ、金貸してよ。な？

まもる
・・・ちよっと待ってろ。

まもる
怒りの表情のまま、上手に消える

渡真利
ソファに座って、スマホをいじっている

まもる
封筒を持って戻ってくる

まもる
ほら。(渡す)

渡真利
サンキュー。(封筒の中を確認して悪いね。じゃあ、借るね。助かるよ、さすが幼なじみ。

まもる
フン！

渡真利
お礼にさ、いいこと教えてやるよ。(スマホの画面を見せて)ほら、コレ。

まもる
・・・「サイトの。ねらい目の女子高生、〇〇がっているのは、この路線だ何だこれ？

渡真利
これさ、電車で痴漢やってる奴らがお互いの情報載せてるんだよ。この路線のこの時間帯で痴漢して声出せない女の子がいたとか、この路線は痴漢しやすいとか。

まもる
お前も痴漢やっているのか？

渡真利
そんなにはやってないよ。まあ、今まで5、6回かな？このサイトの情報、結構正しくてさ、この情報通のやると本当に捕まった事ないんだよ。

まもる
痴漢は、オしはちよっと・・・

渡真利
そうか？ いいんだぞ、あのドキドキ感が。もうちよっと触ったら声を出されちゃうんじゃないかなと思いつつながら触るのがたまらない。

こつしちやいられないぞ。(下手に去る)

まもると景子、下手よりテーブルを運びながら入ってくる

景子 なんだい、あたしはお稽古から帰ってきたところなんだよ。

まもる いいから手伝ってくれよ。頼むよ。

景子 こんな時だけ頼んでくるんだものね。

景子 まもる 全くもう

まもる でしょう？ 本当に頼むよ。

景子とまもる、下手に下がり、イスを1個ずつ運んでくる

景子 年寄りをあんまりこき使つもんじゃないよ

まもる まだ全然若いよ。

景子 その適当な誉め言葉、本当にお父さんそっくり。

まもる はいはい、そうだよ。ありがとう。

景子 あんだ、そんな恰好で行くの？

まもる あ！

景子 全くもう・・・(上手に消え、洋服を持ってへる)ほら、これ着て。

まもる ああ。(着替え始める)

景子 全く、自分の服装に気を使わない所もお父さんそっくり。あの人はさ、私と二人でデートするって日でも、平気で作業着で待ち合わせ場所に来たりしたからねえ・・・

まもる じゃあ、行ってへるよ。

景子 ああ、いってきな。

まもる、下手に消える。景子、それを見送り、ため息一つついて、上手に去る。

下手より、風張美奈が入ってきて、上手寄りのイスに座る。と同時に、照明が変わる。

下手より、あわててまもるが入ってくる。

まもる すみません、お待たせして

風張 いえ。私もさっき来たばかりですから。

まもる (座って)それで、電話で言っていた吉田課長のことなんですけど……

風張 ああ・・・吉田課長、お亡くなりになったんです。昨日の夜、会社の帰りに車で帰宅中に、事故で。

まもる そうですか・・・あの・・・事故なんですか？

風張 エ？ ええ。そうです。事故です。何か、ブレーキが故障していたみたいで、カーブの道路を曲がり切れずに建物
32

まもる はー・・・そうですか・・・突然ですね・・・

風張 ええ。課長の奥さんからの電話で知って、会社のみんなも本当に朝からびっくりしてました。

まもる そりゃ驚きますよ・・・あの・・・本当に事故だったんですよね？

風張 はい。一応、警察もいろいろ調べているみたいですけど・・・事故で間違いないんじゃないかって奥様も言っ
ました。

まもる それは・・・そうですか・・・

風張 大丈夫ですか？ 草加さん、ショックですよ？ 課長とは、私達よりも長年一緒に働いてこられたから・・・

まもる ああ・・・すみません。ショックはショックなんですけど・・・悲しいと言いますか・・・

実はですね、先日の会社での顧客データの事件があったじゃないですか？

風張 あ、はい。

まもる あれですけど、実は、あれって吉田課長なんです。やったの。

風張 エ？(ちよっと怪訝そうな表情)

まもる 本当なんです！ 信じて下さい！ 私はあのデータを課長に渡したんです。課長専用のクラウドに。そしたら、あの情報漏洩事件が起きて、課長が私にしばらく自宅待機してると上から命令が出たって言ったんです。

風張 ……そうなんですか？

まもる そうなんです。課長、私のいないうちに私のパソコンを使って、私が犯人のようにいろいろと細工したんですよ。

それで、私に会いに来て、君がやったと認めるなら社長にとりなすって言ってきたんですよ。

風張 そんなことまで……

まもる たぶん、今までも、会社の情報を外部に流していたんじゃないかと思うんです。たまたま、今回が表沙汰になっただけで。それで……すみません。風張さん。課長のパソコンがあるじゃないですか？ あれの

中に、何か、今回の事件の証拠みたいなものが残っていると思うんですよ。そこに証拠があるか、ちよっと調べてみてもらえませんか？

風張 エ？ 私が、ですか？

まもる (うなづいて)本当は私が行きたいんですが、社長は吉田課長の言葉を信じて私を疑っているみたいだし、そんな私が課長のパソコンを調べるわけじゃないでしょうから。

風張 でも……

まもる お願いします！ 私を助けると思っ！

風張 ……わかりました。それで、本当のことが分かるなら、やってみます。

まもる (頭を下げて)ありがとうございます、よろしくお願いします

風張 はい……

まもる 良かった。信じてもらって。

風張 ごめんなさい。正直言わせてもらいますと、まだ信じたというわけでは……ただ調べる事は調べます。私も本当の事が知りたいです。

まもる わかりました。

風張 ただ・・・あの・・・もし、もしですよ、吉田課長がそんなことしていたのなら・・・
まもる はい。

風張 亡くなった人にこう言うのはアレですけど・・・課長に、天罰が落ちたんじゃないでしょうか？

まもる 天罰・・・ですか・・・

風張 じゃあ、すみません。私、もう会社に戻らないと。(立ちあがる)

まもる はい。わざわざすみませんでした来ていただいて。ありがとうございます。

風張 いいえ。

まもる パソコンの件、よろしくお願ひします失礼します。

風張 分かりました。何か分かりましたら、ご連絡しますので。

まもる はい。

風張 では、失礼します。(お辞儀をする)

風張、下手に去る。

まもる (立ち上がり、上手に母さん、ちよつと手伝つてよ。)

景子 (上手より出てきて)なんだいまたかい。

まもる しょうがないだろう

まもると景子、テーブルを下手に運び、また出てくる

景子 片付けべらい一人でやんなよ。だいたい、私以外に、人いないのかよ？

まもる だから、手伝わせて悪いなって思っているよ。

景子 本当かね？

まもると景子、イスを持って下手に運び、また出てくる。

景子 これで終わり？

まもる うん。ありがとう。あ、そうだった。(合図をすると照明が部屋の中に変わる)

景子 なんかあんたスッキリした顔してんね。なんか、いいことでもあった？

まもる 何言ってるんだよ。

景子 じゃあ私、買い物に行ってくるから。

まもる さっき帰って来たのに忙しいね。

景子 私は忙しいの。

まもる そうだね。じゃあ、いってらっしゃい。

景子 ああ。

景子、下手に去る

まもる、ソファに座る。

友美 (下手のドアを開けると同時に)「こんにちは」。

まもる おお！ エ？ と、富永さん？ なんていきなり？

友美 お母さんが出かけるのが見えたのよ。ドアに鍵もかかっていなかったから、いきなり入っちゃった。驚かせて悪かったわね。

まもる ハア・・・

友美 どう？ もう聞いたでしよっ？

まもる え？

友美 アしよ、あれ。吉田。

まもる ああ・・・聞きましたよ。でも事故だったんですってね。いやー、すみませんお仕事する前にこんな事になって。

友美 そうよねえ。結構大変だったのよねえ

まもる エ？

友美 事故に見せかけるのは。

まもる ええ？ ていうと・・・

友美 仕事よ。

まもる じゃあ、たまたま事故が起きたわけじゃ・・・

友美 ないわよお。誰も見ていないし監視カメラにも映らないような時を選んで、駐車してある車の中に忍び込んで、プ

しーキに細工したのよ。大変だったのよねえ、ホントに。

まもる ……

友美 あら？ あなたの頼みでやってあげたのに、なんか言う事はないの？

まもる あ、ありがとうございます。

友美 いーえー。それでね、今日は、一応、その報告に来たの。無事仕事が終わりましたって。

まあ、本当に言いたくないけど、結構時間と手間がかかったわ。

まもる それは、わざわざどうも・・・

友美 それで・・・草加さんの息子さんの願いを一つ、アタシはかなえてあげたわけじゃない？

まもる (渋々ながら)はあ・・・

友美 それでさ、今度はね、あたしの願いも一つかなえて欲しいんだけど・・・

まもる エ・・・願って・・・

友美 (体を寄せてきてちよっとねちよっつい笑顔で)ネエ？

まもる ……いやいや、私は、そんなにいい男ってわけでもないですし、そんな立派なアしなわけでもないし、

そっちにそんな自信も無い方ですし・・・

友美 なに？ なんの話？ 違っわよ、ちょっとね、ボランティアをやってほしいのよ。

まもる ボ、ボランティアですか？ 何を？

友美 人助けよ人助け。

まもる だ、誰の？

友美 あ・た・し・の。

まもる な、何をするんですか？

友美 たいしたことじゃないの。ちょっと、ほんのちょっとだけ、手を貸してほしいの。

まもる へ？ 手を貸すって・・・

友美 簡単よお。誰にもできることだし、すぐ終わる。ただちよこつとアタシと連れ立って歩くだけなの。

まもる ……歩く？

友美 なに？ ひよつとして、いやなの？

まもる うーん・・・

友美 アそう？ あたしはあなたのお願いを命がけてやったのに、あなたはこんな簡単なお願いも出来ないの？

じゃあいいわよ。吉田さんの事・・・もし誰かに言われたら困るわよね？

まもる (グッと渋い表情)

友美 どうする？

まもる ……

友美 どうするの？

まもる や・・・やりますよ。

友美 そう？ ありがとう。

まもる あの・・・歩くだけですよね？

友美 そ。何か買ってほしいなんて言わないわ。

まもる　すぐ終わるんですよね？

友美　あつという間。すぐ終わる。

まもる　あと……一応お聞きしますけど、それって、安全なんですよね？　例えば何か私が危ない目にあう可能性

がある……とかってのは、ないんですよね？

友美　(にっこり笑って) びっくりまするべからい安全よ。

F・O

第四幕

翌日。

午後12時頃。

家の中。誰もいない。

Beates of Lady Madonnaが流れるがやがて止む。

下手より、慌てた様子のまもる、走って入ってくる。息も荒い。

まもる、ソファにつかまり、何とか息を落ち着かせようとしている

少し遅れて、友美が入ってくる。友美は落ち着いている。

友美 おじゃましまーす・・・ちょっとお、大丈夫？

まもる だ、大丈夫って、大丈夫なわけじゃないじゃないですか！

友美 あらあら、そんなに息切れちゃって。

まもる あなた・・・昨日、びっくりするぐらい安全って言いましたよね？な、なのに・・・なんですかあれは？

友美 なにって、ちょっとあたしと一緒に歩いただけだったじゃない。

まもる 確かに、今日あなたに呼び出されて行ったら、いきなり腕組んで歩きだしました。それで裏通りに入って行って「あなた、今日の夕飯なんにするの？」って突然夫婦みたいに声かけてきて「あらあなた、明日も帰り遅いの？最近、お仕事大変よねー」って言ったと思ったら、突然バッグから銃を取り出して、前を歩いていた人に（指で銃を作って）バン！バン！バン！バンバン！あれでびっくりするなって言う方が無理でしょう？

友美 あらー、ひよっとして、シヨックだった？

まもる シヨックもなにも・・・

友美 でもおかげでうまくいったわ。ありがとうね。あいつら、まさかこんなくたびれたおじさんお婆さんの夫婦が撃っ

てくるなんて思ってもみなかったって顔だったわよね。

最後のヤツの顔見た？ 「な、なんだおめえらー！なんでおまえらみたいなのがー」って叫ぶ顔にバン！
無様すぎて、笑っちゃったわよねー。

まもる あのこと人たち・・・何で殺されたんですか？

友美 頼まれたからよ。あの偉そうな男いたでしょう？はげた。あれが標的。

まもる じゃあ、他の人たちは？

友美 知らないわよ。とりまき？仲間？じゃないの？

まもる そんな軽い感じで、簡単に・・・

友美 簡単よ。向こうより先に撃てば向こうは死ぬ。それだけ。

まもる

友美 それよりさ、のど乾いちゃったわ。お茶でもいただけないかしら？

まもる

友美 すみません、おかまいなく。(座る)ハー、やっと一仕事終わった。全く、最近は防犯カメラが増えちゃったから、
やりにくくなったわよねえ。昔は・・・(何かに気づき、急に立ち上がる)

景子、下手から入ってくる。

景子 あらあ！こんにちは。

友美 どうもすみませんおじゃまします。ちよっと、そこで息子さんにお会いしています。

景子 まもるに？ あらー、そうなんですか？

友美 ちよっと、そこで立ち話をさせていたさきまして、そしたら、なんか、まもるさんと私で、よく・・・読む本、
本です。本の趣味が偶然にも一緒に意気投合しまして、その・・・まもるさんが本を貸してくれたのって、
言っていただいて、それでおじゃまさせてもらったんです。

景子 ああ、そんなんですか？　じゃあまもると本の趣味が同じなんですか？
友美 ええ。本当に偶然なんですけど……
景子 あのこの趣味と同じ女の方は、初めてですね。
友美 あ、そうですか？　ホホホホ……
まもる (お盆にお茶を載せて戻ってくる)
まもる あ、かあさん。
景子 ただいま
まもる ……おかえり。
景子 あれ？富永さんにお貸しする本持って来たんじゃないのかい？
まもる 本？
友美 ほら、私が読みたいから貸してほしいってお願いした、まもるさんのお持ちのあの本
ですよ。ね？まもるさん(分かるでしょ？という顔で言う)
まもる あ、ああ……本、本です、すみません、今持ってきましたね！
(慌てて、お盆を持ったまままた上手に戻る)
景子 なに慌ててんのかしら。お茶お出ししないでまた持って行っちゃって。ねえ？
友美 そうですね……
景子 そうそう。この前は、ミカン、颯太君から頂きまして、ありがとうございます。
さっそくあの日に1個食べてみたら、とっても甘いミカンでしたわ。ごちそうさまでした。
友美 いえー、いいんですのよ。たまたま安かったんですから。
景子 あら？　田舎から送られてきたものだったってお聞きしましたけど？
友美 あらそうでしたわ。すみません、ちょっと勘違いしてまして……
まもる (本を持って戻ってくる)ハイ、すみませんお待たせしました。本ですね。これです。
「エロエロ魔女の白昼不倫ホテル」

友美 ああ、ありがとうございます。エロエロ魔女、ね。読みたかったんです、これ。

景子 富永さんって、自分に正直な方なんですね。

友美 そう・・・なんですかねえ。

景子 あ、まもる、今日はどこ行ってたの？ なんかソワソワして出かけていったけど？

まもる ああ、今日か・・・今日はさ、実は・・・(友美が景子の背後で銃を向けている)

景子 どうしたの？

まもる いや・・・なんでもないよ。

景子 (後ろを振り向く)

友美 (銃をさっとバッグに隠し)あら？ちくわを買ったはずなんだけど・・・

景子 (まもるに向いて)なんなの？ なんか変ねえ・・・あんだ、何か隠し事してるんじゃないの？

まもる あのさ母さん、実は・・・(友美が銃を出す)さ・・・さま・・・さま・・・さま・・・さまさまな動物がいる場所に行ってたんだよ！

景子 なに？ 動物園に行ったの？

まもる そうだよ。いろんな動物が・・・死んでたり・・・(友美が銃口を景子に向ける)死んでたように寝ていて、

つまんなかったなあ！

景子 (後ろを振り向く)

友美 (銃をさっとバッグに隠し)このカバン、もう古いのよねえ・・・

景子 なあんか、おかしくない？ まもるも富永さんも・・・

まもる おかしくなんかないよ。

友美 そうですよ。アタシ達、なにも変じゃありませんよ。

まもる まああんな場面を見たら・・・(友美が銃を出す)みたら、みたらし団子はおいしかったなあ！

タレガついて、あまじよっぱくて。

景子 (少しフェイントをして振り向く)

(少しフェイントをして振り向く)

友美 (ちよっと間を外されたが慌ててごまかして体を動かして) ああ、最近運動してないわねえ……

景子 (首をかしげて) まあいいけど。

友美 あらまあこんな時間。じゃあ私、そろそろ失礼させていただきますね。

まもるさん、すみません。ご本、お借りしますね。

まもる ああ、どうぞ。

友美 じゃあ、どうも。

景子 すみませんねえ、おかまいもしませんで。

友美と景子、下手に去る。景子、すぐに戻ってくる。

景子 帰ったよ。なんかちよっと変わった人だね富永さん。あ、あんたさ、そういえば、

会社はどうなってんの？ もう休んで1週間くらいになるんじゃないの？

まもる ああ……

インターフォンが鳴る。

景子 はい。誰かしら……

景子、下手に行く。景子と颯太、入ってくる。

颯太 こんにちは。

景子 お母さん、いまさっき帰ったのよ。

颯太 まもるさん……

まもる はい？

颯太 いえ、なんでもありません。コシ、親戚からもらった佃煮です。どうぞ。

景子 あらあ、すみませんねえ、とりあえず座って。

颯太 ……いえ、今日は帰ります。おじゃましました。

景子 あらそう？ わざわざすみませんねえ。(下手に見送って戻ってくる)なんだったのかしら？

まもる さあ……

F・O

第五幕

暗闇の中、インターフォンが鳴る。

その二日後。午前10時頃。

まもると友美が下手から入ってくる。

まもる 今日は何んですか？

友美 あら、そんなに迷惑そうな顔しないでよ。

まもる 正直言っ、あなたと逢うことはあまり……

友美 いいじゃない。お互い、持ちつ持たれつなんだから。

まもる そんな共犯みたいに言わないでください。で、今日はなんですか？

友美 お借りしたご本、お返ししようと思って来たの。

まもる ああ、それはどうも。(本を受け取って)面白かったですか？

友美 読むわけではないでしょう？ あ、あとね、(バッグから何かを出して渡す)ハイこれ。

まもる ……これは？

友美 どうぞ。

まもる 腕時計……くれるんですか？

友美 欲しければどうぞ。

まもる アし？ この時計って……バタフライ？

友美 そうね。

まもる これは……あいつのだ。渡真利……なんであなたが持ってるんですか？

友美 (座って、にこにこの微笑む)

まもる ……よく分からないんですけど……何で？

友美 分からないかなあ……

まもる え？……(友美を指さして)え？

友美 (うなづく)

まもる (人差し指を首に当てて)エ？

友美 (うなづく)

少し沈黙する二人。

まもる ウエッ！な、なんで？

友美 だって、あなた、あいつにずっと嫌がらせされていたんでしょ？ それに、お金を貸してくれて表面では言っ

ておいて、ほとんど脅されて巻き上げられてたみたいだったし。

まもる な、なんでそれ知ってるんですか？

友美 その植木鉢の中に、しかけておいたの。

まもる しかけた？(植木鉢の中を見る)あ！ これってなんですか？

友美 分からない？

まもる (考えて)……盗聴器？

友美 そ。

まもる いつの間に？

友美 まあ、ここには何回もお邪魔させてもらってましたから。

まもる そんな……

友美 それに、あの人、渡真利さん……だったかしら？電車で痴漢とかやってたんでしょ？アタシ、そういう男、

特に許せないのよねえ……だから、本当に念入りにやらせてもらったわ。

あの人、手足縛られてもね、「ババアてめえとか「ぶざけんな」とか大声出して怒ってくるのよ。それを

見ながらアタシ、まあ楽しくて楽しくて。でもね、手の指を、2本・・・3本ぐらいかなあ、ナイフで切り落としたり、泣きながらごめんなさいって言ってたわ。反省するの遅すぎよねえ。

まもる・・・あいつが急にいなくなったら、騒ぎになるんじゃないですか？ 警察とか・・・

友美 多分、大丈夫よ。細かく切り刻んでから埋めたから。それに、四十過ぎた独身の男が行方不明になりましたって言っても、警察だってそんなに深刻に探さないわよ。

まもる・・・なんでなんです？

友美 何が？

まもる なんでそんなひどい事ばかり出来るんですか？ 吉田課長の事と聞いて・・・

友美 ちよっと待ちなさいよ。吉田課長のことお願いしてきたのはだあれ？

まもる (グッとと言う表情)

友美 ねえ？ 誰が、吉田課長を始末して欲しいってアタシに言ってきたの？

まもる・・・私です。

友美 そうよね？ ああありがとう。あなたがアタシを責めるように言ってくるから、ひょっとしてアタシが勝手に

吉田課長をやっちゃったのかと思っただわ。(まもるの襟元を持って)ねえ？ ひとつ教えてあげるわ。人間の欲望で一番強い欲望って知ってる？

まもる よ、欲望？

友美 そう。性欲、金銭欲、独占欲、食欲、いろいろあるわよね？ どれが一番強いと思う？

まもる し・・・食欲？

友美 ブー。正解はね、自分は正しいんだ、自分は正義だって思う欲望。どんな悪事をしたってね、人は自分を正当化する為にはなんだって言うのよ。泥棒してもあんな所に金を置いとくヤツが悪い。貧乏な自分をそのままにしておく

国が悪い。嘘をついたって嘘をつかせた周りの奴が悪い。人を殺しても自分に殺意を抱かせたアイツが悪い。誰もかれも、自分が正しいって思ってもらう為には他のちよつと悪いヤツのせいにして、正義ヅラでこのうと暮らし

てるの。

まもる わ・・・私が悪いって言うんですか？

友美 (思わず)フフ。

まもる な、なんで笑うんです？

友美 (手を離して)いや、人間って愚かだなんて思ってた。

まもる しかし・・・なんであなたは、こんなことやっているんです？どう見たって、まあ言い方悪いですけど、普通の人

じゃないですか。スーパーでレジ打ちとか、どこかの会社の事務とか、他にも仕事はあるでしょう？それが、なんでこんなことを？

友美 ・・・・まあ、いろいろあるのよ、女には。本当にいろいろ。

まもる (ため息をつきながら首を振る)

友美 アタシだって、好きでやってるわけじゃないんだだけね。

まもる ・・・・エ？

友美 まあいいわ。それでね、今度も、あなたのために一仕事してあげたわけじゃない？

まもる 頼んだわけじゃないですけど。

友美 だから、またあなたにちよっと一肌脱いでほしいのよ。

まもる 一肌って・・・またやるんですか？

友美 大丈夫ヨ。またちよっとだけですぐ終わるから。この前だってそうだったでしょう？

まもる いやでも・・・もう・・・私は・・・

友美 ふーん・・・吉田課長のこと。あと、渡真利さんのこと。警察に言って話してもいいんだけどなあ・・・

あなたに頼まれてやりましたって。

まもる そんな！もとはと言えば、あなたが銃を持っている事を黙ってほしいからって言ってきてあんなだったんだし、渡真利については全然関係ないですよ！

友美 全然関係ないって言えるの？ もうね、一蓮托生なの。アタシとあなたは。

まもる ……アー！…うー… (頭を抱える)

友美 そんなに思いつめないで。大丈夫よ、実際にやるのはアタシ。あなたは隣でいるだけなんだから。

まもる また…人殺しに手を貸すんですか？今まで何も悪い事してないのに…

友美 エ？

まもる な、何です？

友美 エ？ エ？ ええー？

まもる なんなんですか？

友美 あなたってさ、もしかしたら、自分がいい人で人を傷つけたりしたこともない、まっさらできれいな人間だとも思ってる？(笑)言っとくけどね、そんな人間いないから。人間、大なり小なり、言葉や態度で誰かを傷つけてるし、汚い事をやってるの。そんなの、ただそれに気付いていないだけなんじゃないの？

まもる (悔しさから、フンっと鼻息を吐く)

友美 あらごめんなさいね、ちよっと言い過ぎたわ。ア！

まもる (ビクッとするな、なに?)

友美 渡真利さん。指を2、3本切り落としたら「ごめんなさい」って謝ってきたって言ったけど、アレ間違いだわ。

指をね、4本切り落としたら、泣いて謝ってきたの。

まもる ……

友美 今思い出したわ。結構ガマン強かったのね。(にやっと笑ってそれじゃあ、また日にちが決まったら連絡するわ。じゃあね。おじゃましました。

友美、下手より去る。

まもる、座り、呆然と動かない。そのまま15秒が経つ。

まもる ……そつだ。時間…(壁の時計を見て)まずい！ やばいな…

まもる、急いで下手に去る。

まもる、友美、イスを持って出てくる。

友美　なによ、アタシ、帰ったじゃない。

まもる　お願いしますよ。人がいないんだから。

友美　人がいないって言うてもね……

まもると友美、下手に下がって、一緒にテーブルを運んでくる。

友美　だからってさ、何でアタシがこんな運ばないといけないの？

まもる　ちょっとだけだからいいじゃないですか？すぐ終わりますよ。

友美　なんかさっき聞いたみたいなセリフね？

まもる　そうですね？

友美　もういい？じゃあ、帰るわよ。

まもる　はい。すみません、ありがとうございます。

友美、下手に去る。

まもる、上手寄りのイスに座る。

照明変わり、コーヒーショップの中が変わる。

風張、下手から入ってくる。

風張　すみません。私が呼び出したのに遅れてしまって。

まもる　いえ。私もちょっと遅れたので。すみません。

風張 (座って店員に) カフェエラテをお願いします。(少し待って) 草加さんがこの前言われたこと・・・吉田課長のパソコン、調べてみたくんです。

まもる あ、それで・・・どうでした？

風張 ええ。そしたら、会社のいろいろな機密情報をまとめたファイルが見つかって、その中のほとんどが、今までどこからか分からなかったけど外部に漏れたデータだったんです。

まもる じゃあ、課長は、今回だけじゃなくて、今までも・・・

風張 会社の機密情報を外部に流していた可能性があります。

まもる そうですか・・・

風張 あと、受信ボックスに、どこか不明のアドレスから「報酬振り込みました」とだけ書かれたメールが入っていました。うちの取引先じゃありません。

まもる はあ・・・

風張 私、山本さんと一緒に課長のパソコンを確認していたんですけど、山本さんも「これはちょっとおかしいよね」って言ってました。

まもる ああ、そうですね・・・

風張 山本さんから上の方に報告して、今回の件、改めて調査するみたいです。私達、草加さんが犯人みたいな感じで考えていた所があったので、それは草加さんに申し訳ないなって話してまして・・・草加さん？

まもる ア？ ああ、はい？

風張 聞いてました？

まもる は、はい。聞いてましたよ。まあとにかく、調査してくれるだけでもありがたいです。

風張 そうですね。川辺さんや若林さん、田中さんも、調査して全部はつきりしたら、草加さんに戻ってきてほしいって言ってました。もちろん私も・・・草加さん？聞いてます？

まもる あ、ハイ。聞いてますよ。すみません、無理なお願いして、ありがとうございました。

風張 私はいいんですけど・・・大丈夫ですか？何か、心ここにあらずって感じがしますけど・・・

まもる すみません、大丈夫です。

風張 ならいいんですが・・・いろいろあって、精神的にもショックだったかなと思って・・・

まもる そういうわけではないんですよ。まあちょっと、心配事がありまして・・・

風張 そうですか・・・何か、お家の事で？

まもる ええまあ、家の事と言えばそうですねですが・・・ちょっと嫌な用事が・・・

風張 用事、ですか？

まもる でもいいんです。すぐ終わるって言ってましたので。ただこれからこの用事が続くのかな・・・と・・・

風張 (よく分からず)はあ・・・よく分かりませんが、私で何かお手伝いできることがあったら・・・

まもる ああいいんですいいんです。(少し空気を变えようと)そうですね、風張さんのお子さん、お元気ですか？

風張 ええ。二人とも毎日元気にやっていますよ。

まもる 前に会社に来たときは、こんなちっちゃなお姉ちゃん、赤ちゃんの男の子でしたよね？

風張 よく覚えてますね。もう何年も前なのに。

まもる 上のお姉ちゃん、もう4歳ぐらいですか？

風張 5歳になりました。保育園の年長さんです。

まもる もう5歳ですか？

風張 ええ。私が迎えに行くと、「ママおつかれさま」って言うってくれるんです。

まもる へ・・・

風張 下の弟が3歳なんですけど、上の子、弟がいけない事すると注意する口調が私にそっくりなんです。

まもる 弟も「ママみたい」って言うって。

風張 かわいいですね。面倒見がよさそうなお姉ちゃんだな。

まもる 弟がいるからなのか、保育園でも、下の子には優しいですね。

風張 そうなんだ。

風張 この前、駅前のサティのおもちゃ売り場で、弟が、仮面ライダーのベルトが欲しいってぐずったんですよ。

結構出してもいいなあ

まもる あ、あの消すとか殺し屋って言う言葉は・・・ちょっと・・・

風張 エ？

まもる ほら、例えばですけど、このご時世、どこで盗聴とかされているか分からないから・・・

風張 (??という表情)

まもる ホントの本当に例えばですけど、気軽に言ったり思ったりも現実になるかもしれないかって・・・
言霊っていいますし。

風張 あー・・・そうですね。すみません。

まもる いえ、いいんです。

風張 あ、もうこんな時間。私、そろそろ会社に戻らないと。

(お金を渡して立ち上がり)じゃあ、会社で待ってますんで。

まもる はい。わざわざありがとうございます。

風張 それじゃあ、失礼します。

風張、下手に去る。

まもる、イスの下とかをひっくり返して盗聴器を探す。

と思ったら、風張がまた戻ってくる。

風張 どうしました？

まもる いや、「このイスいいイスだなあ。どこのメーカーかなあ」と思っています。忘れ物ですか？

風張 ごめんなさい。(テーブルを指して)手伝いますね。

まもる あ、すみません。

まもると風張、テーブルを運ぶ。

まもる すみません。風張さんにこんなことまでやってもらって。

風張 いいんですよ。私、こんな雑用やるの、慣れてますから。

まもると風張、イスを運ぶ

まもる それでも、人がいないからってやってもらっちゃって・・・

風張 いいんですから。気にしないでください。これで、終わりですか？

まもる はい。

風張 じゃあ、こんどこそ、失礼します。(手を振り下手に去る)

まもる (手を振って)さようなら。

照明変わり、家の中。

まもる、ソファに座っている。

まもる (手を振って)さようなら、か・・・(とニヤニヤしている)

颯太、下手より、入ってくる。

まもる え？

颯太 ……こんにちは。

まもる あ……こんにちは。颯太君？

颯太 (タオルをこれ、お宅の洗濯物です。風で飛んできてました
まもる あ、そうなの？(タオルを受け取り)わざわざありがとう。

颯太 いえ・・・あの・・・うちの母が、何か、ご迷惑とかおかけしてませんか？

まもる え？お母さんが？

颯太 はい。

まもる (しばし考えて) いや、特にはなにも・・・

颯太 そうですか・・・

まもる お母さん、何か言ってたの？

颯太 いえ。

まもる ・・・・そうか。

颯太 じゃあ・・・失礼します。

まもる あ、ああ。わざわざありがとうね。

颯太、下手に去る

まもる ・・・・アし？ これってうちのタオルか？ 見覚えないけど・・・それに、今来た時って、ピンポン

鳴ってないよな・・・あれ？ あれ？ あれ？

F・O

第六幕

その二日後。午後三時ごろ。

Beatles の「Lady Madonna」が流れてやがて止む。

静寂のまま15秒。

下手より、まもるが入ってくる。慌てて、走り込んでくる。

息が荒いまま、ソファに座る。まだ息が荒い。汗を拭く。

そして、下手より友美が入ってくる。友美も慌てて走り込んできて、息が荒い。

まもる …… なんなんですか、あれ？

友美 ……

まもる …… 安全じゃなかったんですか？

友美 ……

まもる …… どうなってるんです？

友美 ……

まもる …… いいですか？ 最初はこの前と同じでしたよ。あなたと私が腕組んで歩いて、前から男だらけの

集団が歩いてきました。あなたが「あらあなた、もうじき今度お母さんの誕生日よね？」って言って言ってバッグから銃を出そうとしたら、前にいた男が二人銃をかまえてこっちにー。あなたの撃ったのが速くて、そいつらが倒れたけど、

バーン！ なんだ？と思ったたら、後ろのビルの上から、ライフルをこっちに向けている男がいて……

友美 ……

まもる …… そうですよ。撃ちましたけど、今度は横のビルから、バーン！ 前にいた男達も銃を出して、バン、バン、バン！

あなたも、バン、バン、バンバン！……銃撃戦ですよ。この日本で。危うく、撃たれるところだった！

友美　でも撃たれなかったわよ。

まもる　ええ、運よく、です。一体どうなってるんですか。

友美　たぶん……こっちの情報が漏れた？

まもる　どこからです？

友美　分からない。でも結果的にはバシてるからああなったんだわ。

まもる　じゃあ……ここは大丈夫なんですよ？

友美　あそこにいた全員は撃てなかったから……

まもる　だ、だったら、ここに逃げてきたのが見られていたら……

友美　(窓をのぞき込んで)あの茶色いビル、なに？

まもる　(窓をのぞいて)あれは、向こうの通りのマンションです。

友美　あの上で何か光った。

まもる　え？　光ったって、なにが？

友美　狙われているかも。(バッグから銃を出してまた窓からのぞく)

まもる　……ここを、狙っているんですか？

友美　かもしれないわね。最近、ちょっとなんか嫌な感じがしてたのよ。なにか、誰かに尾けられてるみたいなの……

まもる　誰かって誰ですか？　ちよ、ちよっと、ここは安全なんですよ？　私は安全だって言いましたよね？

友美　しょうがないでしょ？　想定外なんだから。

まもる　そんな想定外って……こっちは巻き込まれたようなものなんですから。だいたい人をそっちの仕事に引きずり込んで、そんな無責任じゃないですか？

友美　無責任？　誰がアンタの安全に責任持ちますなんて言ったの？　自分の安全は自分で守るものでしょ？

まもる　あなた……言ってること無茶苦茶ですよ！　安全だすく終わるって言って、全然安全じゃないしすく終わってないじゃないですか？　私のような善良な一般市民をこんな危ない思いさせて、悪いともなんとも思わないんですか？

友美　ゴチャゴチャ言うな！　誰が善良だ？　誰がいい人だ？　誰が大人しい羊だ？　笑わせんな！　吉田博夫を殺してくれたって言ったの誰？　渡真利昭が死んでホッとしたのは誰？　善人ぶるな！

まもる　（何も言えなくなってしまう）……

友美　とにかく、あのビル……なんかある。（窓に集中する）

まもる　（友美のバッグが無造作に置かれていることに気づく）

友美　アタシが狙うとしたらあそこからだから。

まもる　（友美が見ていないすきにそっと動く）なにかあって……なにがあるんですか？

友美　分からないけど……狙われているってのは分かる。なにかこう……感じるのよ。

まもる　長年の勘……みたいなものですか？（友美のバッグの中から銃をそっと出す）

友美　そうね……今までも、狙われた事は何度もあった。でも、ギリギリの所で危ないのを逃げてきた……

まもる　やっぱり、勘、よ。その勘を信じてきたから、今まで生き残れた……

友美　（銃口を友美に向けて）なるほど……女の勘、ってやつですか？

まもる　（ふっと笑って）そうよ。あなたもし結婚したら、女の勘には気をつけなさい。

友美　男が思っている以上に……

銃声。

友美が倒れる。

まもる、驚く。

まもる　エエ？　オレ？　オレが？……いやちがう。じゃあどこから……富永さん？　富永さん？

大丈夫ですか？……どうしよう……そんな……これって警察？

いや、無理無理……（下手に何か気配を感じぬ）

下手より、颯太が入ってくる。

まもる あ・・・颯太君?・・・あ、これはちょっと、いろいろと事情が・・・本当にいろいろあって・・・

颯太 (放心した様子で友美に近づいていく)

まもる あの・・・ショックだとは思っただけど、君のお母さんさ、実は仕事・・・

颯太 (バッグから銃を取り出して、用心しながら友美の生死を確かめる)

まもる あ?・・・え?・・・颯太君、それは?・・・

颯太 (まもるを無視して携帯を出して電話をかける) ああ、ヤマザキ?今確認した。オッケーだよ。さすがだね。

まもる ああ・・・ああ・・・分かってる。後はやっておくから。じゃあ、そういうことでよろしく。(切る)

颯太 お母さん!あの・・・これ、どういう事なの? お母さん・・・

まもる 颯太君?・・・

颯太 ああ。悪いけど、颯太で名前じゃないんだよね。こいつも、富永友美って名前じゃないし。ついでに言っと、

まもる 俺達、親子でもなんでもないし。

まもる じゃあ・・・どういうこと?

颯太 俺もこの女も、同じところで働いてるってだけ。マ、たまには一緒に仕事したりしたけどな。

最近、こいつが好き勝手にウロチョロ動いて、あんたみたいな素人巻き込んで仕事したりとルール破りばっか

しているから、上に報告したんだ。そうしたら、「出来るだけ速く処理するよう」ってさ。

まもる じゃあ、富永さんを撃ったのは・・・

颯太 うちの別のヤツ。

まもる (まだ状況が呑み込めない様子)

颯太 (友美を見て)俺も、一歩間違えれば、こいつやってやられちゃうんだな・・・悲しいねえ・・・

まもる あの・・・

颯太 ああ。いろいろとすみませんでしたね。これ、後で片付ける専門の人間が来ますから。

まもる まあ、あなたもいつに二人ぐらい始末してもらったみたいだから、それでチャラってことで。

颯太 し・・・始末って、頼んだと言っか・・・

まもる あーあー。全部調べて分かってるから大丈夫。どっという経緯でそうなったかも。

颯太 そうなの・・・

まもる それじゃあ、もう会わないと思うけど、さようなら。(下手に去ろうとする)

颯太 あ、どうも。

まもる (立ち止まって) そうだ、忘れてた。(まもるに近づいて、銃を向ける)

颯太 ・・・・エえええええ？

まもる (銃を握りなおす)

颯太 (固まっている)

まもる ・・・・誰にも言わない。

颯太 ・・・・はい。

まもる もし言ったら(銃口をさらに押し付ける)

颯太 ・・・・はいいいい！

颯太、フツと力を抜いて下手より去る。

まもる、ガクツと力が抜けて、あわをくう。

まもるの息遣い。

F・O

第七幕

明かりがつくと、舞台中央で、カバンを持ち、まもるが立っている。オープニングと同じ位置。

まもる それから、しばらくして、2人の男がやってきて、富永さんの死体や荷物を運んでいきました。

その後で母が帰ってきました。母は、家の中でそんなことがあったなんて何も知りません。

それからは特に何もなく・・・吉田課長の件は、交通事故ってことで終わったし、渡真利の件は、行方不明ってことで、なんの騒ぎにもなりませんでした。

普通の日常、普通の何気ない時間が過ぎていって・・・あ、私の中で変わったことと言えば、今まで当たり前だった、普通ってことが、なぜか、とても貴重だと思うようになりました。

ただ、それだけなんですけど・・・

景子が上手から入ってくる。

景子 あんた、誰に向かって、自分の気持ちを喋ってるの？

まもる いや、誰にも喋ってないよ。

景子 ふーん、何か、すがすがしい感じで語っているみたいだったけど・・・お帰り。

まもる ください。

景子 会社はどう？ この前みたいに、また入社拒否にならない？

まもる いやだなあ、あれは入社拒否なんかじゃないよ。有給の消化だと言ってたじゃないか

景子 そうだったけ？

インターフォンが鳴る。

景子 はい。

景子、下手に消える。
まもる、上手に消える。

【ここじゃなんですからどうぞ】【いえでも……】【大丈夫ですよ、どうぞどうぞ。息子と二人で暮らしていますので、特
に気になさらなくても大丈夫ですから】【はあ……ではすみません、おじゃまします】と音が聞こえる。
下手から、景子、佐藤元子、が入ってくる。

景子 どうぞ。散らかっていてすみません。

佐藤 いえいえすみません。おじゃまします。

景子 そうですか。富永さんがいた所に越してこられたんですね。

佐藤 富永さん……ですか？

景子 あらごめんなさい。前にあのお家に住んでいた方なんですよ。最後はあいさつもなく、急に引っ越されて
しまったんですけど。

佐藤 ああ、そうなんですか……そういうときはやっぱり、何か一言あいさつしてほしいですね。

景子 今お茶でも淹れますから、どうぞお座りになってください。

佐藤 いえー、今日はほんの引っ越しのご挨拶だけですから、どうぞおかまいにならなくてください。

景子 このへんって、静かなんですけど、不便でしょ？？駅からも遠いし。お店も一番近いのは、その
スーパーあまやくらいですし。

佐藤 ああ、あそこのスーパーですね。いろいろと安そうですね。車で通った時に見かけたんです。

景子 じゃあ、その近くのドラッグストアはご存じ？

佐藤 ドラッグストア、ですか？

景子 ええ。特売の日とかは、そのドラッグストアの方が安かったりしますのよ。

佐藤 どこにあるんですか？

景子 なんて言ったらいいのかしら・・・そのスーパーあまやから、こっ行っって、その先を曲がって、

またひゅって曲がって・・・左です。分かります？

佐藤 あ、ああ・・・(愛想笑い)

景子 駄目ね説明へたで。確かそっちに地図がありますから、ちょっと行きましようか？地図見たらすぐわかりますから。

佐藤 そうですね。地図見れば早いですわね。じゃあ、すみません。(バッグを置く)

景子と元子、上手に消える。

まもる、上手から入ってくる。

まもる 母さん？あれ？声が出たような気がしたけど・・・、(つまづいて、バッグが落ちる)

あ痛、あれ？このバッグ・・・(中身を見てしまっ)ん？

まもる ううそく？(ううそくを出す)

まもる これは・・・ムチ？(ムチを出す)

まもる あと・・・ロープ？(ロープを出す)

まもる なんだこれ？・・・

「のひつはポイントの倍なんですわね」という声がする。
まもる、急いで、バッグをもとあった場所に戻す。

景子と佐藤が上手より入ってくる。

景子 あらまもる、そこにいたんだ。これが息子のまもるです。まもる、この方佐藤さん。ほら、富永さんが

いた向かいの所に引っ越してきたから挨拶にきてくれたのよ。

佐藤 佐藤ですう。よろしくお願いします。

まもる 草加まもるです。こちらこそよろしくお願いします。

佐藤 (バッグを持ち、見てみて)あら？

景子 どうかしましたか？

佐藤 いえ。別に。

景子 あら忘れてた。ドラッグストアの割引クーポン渡すって言ったのにね。もう年とるとなんでもかんでも忘れちゃって。ちょっとお待ちになって。

景子、上手に去る。

佐藤 あの……

まもる はい？

佐藤 バッグの中、見ました？

まもる (下手な嘘で)いえ、見てませんよ。

佐藤 ……みました、よね？

まもる 見てませんよ。

佐藤 見たんですよね？

まもる だから、見てませんって。ハハハ……

Beatlesの[Hello Goodbye]が流れる。
まもると元子、「見ましたよね?」「見てません」の問答を繰り返している中、
幕。

※64ページの元子のバッグに入っているものに関しては、何か他にいい物があったら変更して構いません。

例えば、「ピストル」「ナイフ」「血染めのハンカチ」や「覆面」「レスリングコスチューム」「マント」や

「変なぬいぐるみ」「気持ち悪いぬいぐるみ」「バラバラのぬいぐるみ」なんてのも。三個で何か面白ければ

いいです。(大喜利感覚かな?)私が書いた三個は、はっきり言ってベタです。マア誰でも分かるようなものに

まとめたと言いますか・・・(ことういう所で人間の大きさが出るネ)「太宰治」「三島由紀夫」「芥川龍之介」とか

でもアリか? 「とんねるずのCDを3枚」でもいいかな? 「ヒゲタ醤油」「キッコーマン醤油」「ヤマサ醤油」

とか・・・三個バラバラで「ナイフ」「アリエール」「ポッキー」とか「単三電池」「のぎり」「警察手帳」とか。

とにかく、「コイツ(元子)なんなんだ?」と思わせたらOKです。